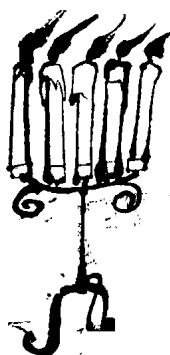


婚約式

曾野綾子

婚約式



曾野綾子
東京創元社

婚約式 定価二八〇

昭和三十三年十月二十日 初版
昭和三十三年三月十日 再版

著者 曾野綾子

発行者 小林 茂

東京都新宿区新小川町一ノ十六

印刷者 浅野 剛

東京都大田区田園調布一ノ二三四

印刷所 金羊社

東京都大田区田園調布一ノ二三四

製本所 鈴木製本

東京都文京区東古川町一四

発行所 株式会社 東京 創元社

東京都新宿区新小川町一ノ十六

電話九段(三三) 八五一一一五

振替 東京 一五六五

万一乱丁・落丁がありましたらおとりかえいたします

Printed in Japan

目

次

婚約式

七

雪あかり

三

祖父の死と少年

七

牛骨

二七

青巖寺風景 二九

美しき古き祖國の形見 一六

乾いた悲劇 一五

火と夕陽 二三

作品掲載誌 二四

カ
ハ
ー
伊
坂
芳
太
良

婚
約
式

婚

約

式

今日、日南田寛ひなんたあの娘、朝香あさかと、桜井周さくらいしゅうとの間の婚約式が行われる。

何という強靱な若い人たち！ あんなにいろいろな出来ごとがあつたというのに、彼らは強引そうに見えていてその実無邪気に、でなければ、反抗的に見えながらたんたと、周囲の有象無象を尻目に結婚しようとしている。

朝香は幼い時から、いくらか精神薄弱である。只その代り、朝香は誰に対してもほんとうに優しく穏かだ。日南田氏も、あの娘がかたづいて、これでどんなにほつとするだろう。い

や、あの父親は変り者だから、そんなまともな感情など別にないのかもしれないが。

私は、今日の式に着て行く為の、シルバー・グレーの絹のスーツにつける蘭をとり寄せるために、いつも届けさせる花屋に電話をかけた。私は今日、美しくなっている必要があった。女は美しくなっているという自信がなければ、物事をよく見られないものなのだ。そして私は今日の婚約式を少しばかりグロテスクなものに思っていた。

「あなたは、今日、何を着ていらつしやるの、次郎さん」私は夫にきいた。

「何かまともな服を着なきやなんないかな」

「そりやあそうだわ。何ていつたつてエンゲージですもの」

「じゃ、あの紺の服にしよう」

次郎は額に垂れ下つた脂気のない髪をかきあげながらこう言つた。次郎は私より六つ年下で、まだどこことなく初々しかった。

「そうね」

私は反対しなかつた。紺の服は、次郎が自分で働いて食べていた時代の唯一の記念であつた。自分の指先をチョークで汚して、いやいやながら高等学校の生徒たちの下手くそな絵の指導をしていた時の。その彼を、今のように飼ひごろしにしたのは私である。彼は魂を、悪魔に売り渡した童話の中の男のように、一人前の男という資格を私に売り渡す代りに、私の

家のテラスで、猫のように気楽に日なたぼっこをするという権利を得ているところだ。

紺の服はもう長い間次郎にとつては不用品なものだった。紺の服というのは、サラリーマンの、ささやかであいらしい誇である。美しい、優しい男に傍にいて貰いたいと思う女は、男に殺風景な紺の服など着せたがらないものだ。

私は忙がしい癖に、いつも心のどこかで退屈していて、しかもその感じが何となく好きだったし、退屈している人を見るのも好きだった。そして和田次郎という人間ほど、退屈に淫している人間も、私の周囲には見当らなかつたのである。

和田次郎は、三年ほど前までの私にとつては全く無関心な存在だった。勿論、気軽に喋ったり、一緒に映画を見たりという程度のつきあいはしていたけれど、それは彼が私の亡くなつた親友の弟だということもあつて、私も忙しくない時、或いは逆にひどく忙しくて気が晴れない時のお相手としてお互いに利用しているという程度に過ぎなかつた。彼は麻布の方のカトリックの修道院付属の或る女学校に、絵の教師として勤め始めた頃だった。細々と食べる位のは月給でどうやらまかなつていたらしかつたけれど、面白く世の中を過ぐすには彼は貧乏だった。そして私はいつの間にか彼の退屈を利用していた。熱中すべき仕事があつて、退屈などとは縁のない男なら、誰が年上の女につき合つて時間をつぶしたりするものだ

ろう。

そうした或日、私は日南田寛夫人の雅子から、日本舞踊の会の招待状を受けとつた。

日南田雅子については、私はどう説明したらいいか、ほんとにとまどつてしまうのだ。つまり彼女は、女学校時代、私より一年下の級にいたのだけれど、いつも私に忠実であり、私を何か偉い人間のように勘違いしていて、その後、この私がさつさと結婚でもしてしまえばよかつたのだから、銀座の洋品店の経営などをひきうけて女ひとりで生きていることを、自分、つまり日南田雅子に対する愛情からだと思つていゝような変つた性格の女だつた。

日南田寛氏は、青年時代長くアメリカにいたという、がつしりした男らしい人で、目下のところ金にも不自由してゐないし、非常に好条件だということ、婚期を失つてゐた雅子はその後妻に行つた訳だけれど、あの日南田氏の腕の中に抱かれれば、何よりもまず雅子の精神的な發育不全症もなおるに違ひない、と私は思つてゐたものだつた。女を変える最大の魔術師は、やはり男以外にはあり得ないのだから。

私は雅子が、日南田氏の先妻の子、朝香の、洋服の世話を見てやつたり、父兄会へ出かけたり、彼女に一生懸命おどりを習わせたりするのを、雅子もこれでやつと一人前にカタがついたという思いではほえましく思ひながら見てゐた。殊に私を驚かせたのは、このまま母とまま子が恐ろしく似てゐることだつた。応対もねれてゐるし、会話にもウィットがあり、そ

してちよつと図々しいようなところのある日南田氏の娘とは思われぬ程、朝香は反応の不明瞭な頭の鈍い娘であつた。そして雅子は、朝香のほんとうの母親になれる年ではなかつたけれど、朝香を生んだのはこの雅子ではないかと思われるほどであつた。朝香の生みの母を知るすべはなかつたが、私は日南田氏という男の、女に対する趣味を、この二人の愚かで美しい女たちの上に見るように思つた。

「日南田は女好きなのよ。いい年して、まだよその奥さんにおちよつかい出したりするの。それでいて日曜になるとクリスチャン面して」

「いい人じゃないの、男らしくて。若かあないけど、悪くはないわ」

私は水をむけたが、雅子は吐き出すように言つた。

「不潔だわ、あんなけだもの」

ここで強いてきき出せば、雅子は私が顔を赤らめるほど、何から何まで夫婦の間のことを喋り出すことはわかつていたが、私にはそれだけの根気はなかつた。雅子はよく馴れた犬と同様、かわいいと思つて度を過ぎすと、すぐ煩わしくなるのである。それに、私は雅子が日南田氏によつてはみたされない病的な女の不満を、私に求めて来られるのは薄気味悪かつた。

その踊りの会というのは朝香の初舞台なのだそうで、私は本当のことを言えば踊りなどに

興味はなかつたのだが、次郎を誘つて行くことにした。朝香の出るのは、丁度真中へんで、出しものは手習子であつた。

幕が開いて、なす紺地に、赤い手毬の模様の衣裳を着て背の高い朝香が現れると私はおかしくなつた。第一こんな大きななりをして手習子を踊るというのは、菊五郎とか梅幸とかがやれば又勿体もつくだらうが、普通では、どうもそれだけで少し頭が悪そうに見える。朝香の動きは日本舞踊というようなものではなくて体操のようであつたし、もつと悪く言えば明らかに精神薄弱児だということがわかるような辻褄の合わない動作があつた。朝香は自分の目で見える方の手だけしか注意しない。観客からはどんな恰好に見えていようと一向おかまいなしである。半紙を裂いて、それで観世縫をつくり、それを丸めてはうる時は、丸めた紙を自分の体の後まで投げ飛ばさねばならないということにばかり氣をとられて、腕を肘の上まで見せて、野球選手のような恰好になる。

この時ばかりは、まわりの観客から思わず笑いが洩れた。私も氣をゆるして笑い、それから傍の次郎に囁いた。

「どう？ 少しへんなお嬢さんでしょ」

次郎は黙つていた。

やがて幕が閉つてから、次郎は、

「あの人は随分正直な娘さんだな」

「どうして？」

「さつきあなたも笑つたとこだけど、あの人は紙くずを後へほうるつていう目的の為に必死なんです。踊りを踊るなんてことは忘れちやつてるんだな。それがバカだつていえばそれ迄だけど」

「へえ、そういう考え方もあるかしら」

その次の幕が終つてから、私は次郎をうながして煙草を吸いに廊下へ出た。そしてそこで偶然、楽屋から出て来た雅子と朝香の親子に会つた。

朝香は、それ以後、いつも私を妬ましく思わせた乳房の豊かさを、ほんの少し匂わせる程度に胸を開けた青磁色の洋服を着ていた。この子の体つきを一見すれば、日本舞踊が彼女にむいていないということははつきりしている。日本の着物が似合う為には、平べつたい悲しそうな胸と、陰気な細い腰が必要なのだ。しかし朝香は、本当に生まれつばなしのようなふくよかな娘だつた。その彼女が大きな、睫毛の長い眼で、次郎を見てひどく驚いたような表情をしたので、皆は又びっくりしたのでつた。

「先生、和田先生」

「ああ、あなたでしたか」